

中 の 人

中
川
よ
し
の

【登場人物】

清子（きよこ・92歳）

聖子（せいこ・33歳）

成子（なるこ・胎児36週目だが、

胎内では17歳の女子高生の姿をしている）

【舞台設定】

2016年、春。

地方都市。

【本編】

1

客入れ時、舞台は明るい。下手側からダイニングチェア、介護用ベッド、バスタブが置いてある。

開演直前にゆっくり暗転、しばらくして明転する。

何もなくなつた殺風景な舞台上に車椅子に座つた清子とその傍らに立つ聖子。

マタニティ服のワンピースを着た聖子の

おなかには子どもがおおり、丸く突き出ている。照明は煌々と舞台に降り注ぐ。

聖子 桜の花びらが舞ってきれいだね。でも、桜ってさ、すぐに散っちゃうでしょう？ 儂くて好きになれないな。まあ、それが醍醐味なんだろうけど。あたしね、一度でいいから桜前线を追いかけて、日本を北上したいと思って。散る前の桜を次々に見に行くの。定年になつたら、ひとりでもいいから旅したいな。

清子 : 聖子さん、わしのおなかには、赤ちゃんがおるんよ。

聖子 え、あ、うん、知ってるよ。

清子 精司さんの子。

聖子 そうだね、精司さんのこと、清さんは好きだもんね。

清子 もう臨月、間もなく生まれるな。

聖子 かわいい子が生まれるに違いないよ。

清子 戦争は終わったかい？

聖子 戦争は終わったよ、ずっとずっと昔に。

清子 精司さん、帰って来ないさね。戦争なんて嫌いだよ、わしは。

聖子 わたしも。

清子 聖子さんの旦那さんは戦争行ったのかね？

聖子 あのね、戦争はもう何十年も前に終わった。あたしが生まれるずっと前。東京オリンピック

クから数えたって20年も前のことだよ。あたしは生まれてもいない。だから、あたしの旦那さんは戦争に行っていない。

清子 今は何年？

聖子 2016年。

清子 おや、そんな何十年前も前に終わったのか、そうかね。じゃあ、なんで精司さんは帰ってこないんだろか。もしかして戦争で死んじゃったのかい？

聖子 死んでなんかいない。それにそんなこと言っちゃダメ。言霊っていうのがあるんだよ。言葉にするとそうなっちゃうの。だから、そんなこと、口にしないで。信じていれば、きくと帰ってくる。

清子 そうか……。あ、今、おなかを蹴った。

聖子 おなかの子は元気いっぱい？

清子 元気、元気。これはきつとやんちゃな男の子だと思うよ。

聖子 おなか、がん蹴ってくる？

清子 蹴るよ。聖子さんの子は蹴らないかい？

聖子 もちろん蹴られるけど、ここんところ、大人しい。だから、ちよつと心配。

清子 お淑やかな女の子かもな。わし、子どもに早く会いたい。寂しくてな。

聖子 寂しい？

清子 精司さんがいてくれたらいいのじゃが。ひと

聖子　　りで生きていくのは辛い。
聖子　　ひとりじゃない。あたしも味方だから。介護
施設の人だって清さんのこと、気にかけてい
るよ。
清子　　ならいいな。それと仕事とはいえ、聖子さん
がわしの面倒を看てくれていたことに感謝し
とる。
聖子　　どういたしまして。
清子　　だがな、わしの心臓にぽっかり穴が開いてい
るんさー。これは精司さんにしか埋められな
い。
聖子　　そうかー。
清子　　精司さんはそれほどわしに欠かせない人なの
だよ。
聖子　　元気な子、生まれるといいね。きっと、その
子も味方になってくれるだろうから。それと
空洞を埋めてくれるよ。
清子　　だとええな。
聖子　　赤ちゃんの名前は考えてるの？
清子　　桜か、桃か、梅がいいと思っている。
聖子　　でも、男の子だって思っているんでしょ？
清子　　そうだな、女の子みたいな名前じゃな。あれ
だ、男だったら、下に太郎をつければいいん
でない？
聖子　　桃太郎とか、梅太郎とか？
清子　　そうそう。

聖子　でも、『サクラタロウ』だと語呂が悪くない？
清子　『サクラタロウ』と書いて『オウタロウ』と

読むんさ。

聖子　ああ、それカッコいい。

清子　もう梅も桃も終わってしまったから、桜太郎か桜にするかな。まあ、梅太郎でも桃太郎でも立派だとは思うけれど。

聖子　散る前に生まれるといいね。でもなんで、桜とか桃とか梅とか、木の名のついた名前にしたいと思ってるの？

清子　日本の四季は美しいから、季節を感じさせる名前をつけたいと思ってるんさ。それと、樹木みたいに健気に育ってほしいからじゃよ。植物のように雨や風に堪えて、黙々と育ち、暖かくなったら立派な花を咲かせる。そんな子になってほしい。それにどの木も毎年、春になると必ず花を咲かせるだろ？　人生、辛いことばかりで、冬のようにしんどい時だつてあるだろうけれど、何度も立ち上がってきれいな花を咲かせられる大人に成長すること望んでいるのじゃ。

聖子　そうかー。なんかジーンとしちゃった。清さんは自分の名前好き？

清子　そうだな、好きだよ。19歳で結婚して、すぐに精司さんが戦争に行ってしまったって、貧しかった生活が余計酷くなったから、生きるの

に必死で泥まみれの生き方だけど、心だけは清らかなつもりでいる。生まれてくる子に恥ずかしい思いをさせたくないからね。貧しくても、清く正しく生きて、その姿を見せたいと思っておるよ。

聖子

清さん、カッコいい。

清子

別にカッコ良かないよ。

聖子

ううん、とても男前。

清子

そう言ってくれるのはあなただけだね。聖子さんみたいにな、やさしい子が生まれるとええなあ。

聖子

そんな、あたしみたいなのはポンコツって言うんだよ。

清子

そんなことない。あなたは、やさしさという才能に溢れた人ですよ。

聖子

そう言ってくれること、ありがたく思うよ。でも、あたしにやさしさがあるとすれば、それは人に厳しくできないってことなんだよ。人に嫌われるのが怖いのに。

清子

そりゃ、誰だって好かれないと思っっているさ。

聖子

でも、清さんは人に媚びてるようなところ見せたことないよね。

清子

それはみんなわしより年下だからだよ。年長者だから、えばってるだけ。

聖子

えばってるようには見えないな。清さんこそ、やさしい人情味のある人だよ。だから施設の

スタッフにも愛されているの。

清子　　そういう実感はないのだがなあ。でも、聖子さんが言うのなら、きっとそういうことなのだろう。ありがたく思わなくちゃ。幸せ者だ、わしは。

聖子　　それもこれも、清さんの人柄が良いからだね。友だちはみんな死んでしまった。だから寂しくて泣くこともあるけれど、そんなふうに寂しがることもないのかもな。わしは何歳になるんだっけ？

聖子　　92歳だよ。

清子　　よくもなあ、そんなに生きたな。

聖子　　すごいよ。あたしの3倍くらい長く生きてる。

清子　　聖子さんは30歳くらいか。

聖子　　今年で33歳になる。

清子　　もう若くないね。

聖子　　ちよつとー、からかわないでよ。

清子　　すまんすまん。でも、『今、それは死』だよ。

聖子　　今、それは死？

清子　　そうじゃ。『今』は時間が死ぬことの積み重ねだからな。人間は死を生きているんだよ。赤子だろうが、20歳だろうが、50歳だろうが、90歳だろうが、それは同じ。薄い氷の上を歩いているみたいなもの。氷が割れて池に落ちたら、すなわち、死。生きることとは死ぬことと薄い氷で隔てられているだけ。だから

ら、若いとか年寄りだとか関係ない。みんな
いつ足元の氷が割れて、沈んでもおかしくな
いんだよ。

聖子 清さん、難しいこと言うよね、たまに。

清子 難しくなんてないさ。

聖子 でも、あたしは死ぬの怖いよ。だって、いつ
その時がやって来るかわからないんでしょ？
痛そうだし、苦しそうだし。

清子 生きることの方がしんどいよ。

聖子 もう生きてたくない？

清子 そうだな。でも、わしのおなかに、赤ちゃん
がおるんよ。だから生きなくちゃな。あの世
で死んだ友だちに早く会いたい気持ちもある
けれど。

聖子 清さん、あの世ってあると思う？

清子 わしは死んだら、まったく同じ人生をまた生
きるんだと思ってる。生まれて死んでの繰り返し
返しが永遠に続くのじゃないかってね。だか
ら死んでもまた聖子さんに会える。もちろん、
すべて忘れて一から同じ人生を歩むんじやが。

聖子 そうかー。

清子 それは拷問かとも思うこともある。

聖子 違うよ、ただの人生だよ。

清子 そうさね、ただの人生よ。だけど、さらりと
そうはなかなか言えん。逞しいな、聖子さん。

聖子 買い被ってくれてありがとう。

清子 わしは弱いから精司さんに会いたいなあ。早く帰ってこないかや。あの人がそばにいれば、この辛い人生と一緒に力をあわせて生きていけるのに。心に空洞があるんだよ。ぽっかりと開いた穴だよ。寂しくて辛くてな、もう生きたくないなとも思うさね。

聖子 またー。笑ってても、言って良いことと悪いことがあるんだからね。

清子 怒ったかい？

聖子 そりゃあ、怒るよ。

清子 でもさ、退屈で仕方ないね。旅行でも行きたいけれど、自分で歩けるのは部屋の中くらいだし。車椅子押ししてもらって行くのも気が引ける。

聖子 でも、赤ちゃん生まれるし、きっと楽しいよ。

清子 そうだね、おなかの子だけがあたしの生き甲斐。精司さんと過ごしたのはほんの僅かだった。

聖子 どれくらい？

清子 結婚した春の間だけ。夏になる前に赤紙が来て……。

聖子 辛かったね。

清子 早く精司さんとの子どもを産みたい。早く精司さんに帰って来てほしい。子どもをあやすところを見たいよ。

聖子 見たいね。

清子 戦争は終わったって言っとったな。

聖子 うん、日本の戦争はもうずっと前に。

清子 どうしたんじやろな。生きててほしいわ。

聖子 きつと生きてる。

清子 あ、またお腹蹴った。

聖子 清さんの子、今日も元気いいね。

清子 そうだ、聖子さんがここで働いていた時みた

いに、小話をひとつしてくれまいか？

聖子 いいけれど、おなかの子に話せばいいのか

な？

清子 それでお願いします。

聖子 そうだな、何がいいかな、(咳払いをして)じ

ゃあ、思い付きで話すね。

清子 (拍手する)

聖子 昔、昔、じゃなくて、未来、未来。あるとこ

ろに月子さんというやさしい女性と、大洋さんというハンサムな青年が住んでいました。

ある日、ふたりはバスに乗って仲良くピクニックに行きました。籐で編んだバッグにお弁

当と赤ワインを詰め込んで。

家から30分で着いたその丘の上からは、街を見渡すことができます。それに視界の両端

に桜の枝が垂れ下がっていて、その桜の向こうに見る下界の街並みは絶景でした。「いい景色

だね」と大洋さんが言います。「素敵だね」と月子さんも言いました。ふたりともその景